MOVIE

監督インタビュー

演出をしない演出。自分の価値観に「居座っている」ダウン症の弟を撮りたかった

『39（サンキュー）窃盗団』押田興将 監督

劇映画とドキュメンタリーの手法をミックスして、人の愛おしさを描く。
悲壮感ではなく障害者をとらえた先に、見えてくるものとは。

おしだ・こうすけ
1969年、神奈川県生まれ。日本映画学校卒。今村昌平作品『うなぎ』(97)ではメイキングを担当、『カンゾー先生』(98)、『セプテンバー11』(03)では助監督。04年、李相日監督『スクラップ・ヘブン』よりプロデュースも手がけ、『夢売るふたり』(12/西川美和監督)などを制作。ドキュメンタリー監督でもある。

構想10年以上 兄弟ならではの自然なかけあい

『39窃盗団』は、ダウン症の青年が主役を演じる、軽妙なテイストのコメディ映画だ。彼の実の兄が相手役をつとめ、メガホンをとったのも兄弟（長男）の押田興将監督。名匠・今村昌平監督に師事し、これまで障害者支援のNPOを題材にした『チャレンジド』などのドキュメンタリーも演出してきた監督は、現在『夢売るふたり』（12／西川美和監督）他多くを手がけるプロデューサーでもある。だが、今回は自らの企画で構想に10年以上をかけた念願の作品をつくりあげた。その思いをこう語る。

「子どもの頃から身近にいるダウン症の弟の清剛（きよたか）は、僕自身の価値観にとても影響を与えてきました。価値観の根っこに『居座っている』という感じ。僕らが当たり前と思っていることが清剛には当たり前でないので、いつも『彼にはどう見える、どう感じてるんだろう？』と、複眼的に物事を見てしまうわけです。だから、自分の人間観を反映させる監督作では、まず清剛を撮らないと意味がないと考えていました」

「でも、ドキュメンタリーで清剛を撮ると、彼がまき起こしたおもしろい出来事は過去の思い出話として出てくるしかない。それではつまらないので劇映画として制作したんです」

この映画は、孤児となったダウン症と発達障害の兄弟が、「心神喪失者の行為は、罰しない」という刑法39条を知り、生きていくために泥棒を働いていく物語である。「ありのままの清剛を撮りたかった」という監督は、彼が出る場面では、ほとんどセリフを書かず、「演出をしない演出」を心がけた。「清剛の行動はアドリブです。彼のいい表情が撮れれば、構図的なよい画はいらないと割り切り、その部分はドキュメントとして撮影しました」

そういった手法のため、この作品は劇映画でありながらドキュメントの要素が随所に入り、そのことで彼の自然でユーモラスな魅力が写し取られている。民家に侵入した清剛は、財布を探して盗るはずが全然見つけられず、どうでもいい置き物に興味を示したり、そこにあった煎餅をかじったりする。ニコニコと戻ってくる清剛を「違うでしょ？」と兄が優しくツッコミを入れる光景は、まさに本当の兄弟ならでは。つい笑えてしまうのだ。

「悲壮感をなくして、障害をとらえたかったんです。そうすることで、障害者の本当のありようがより観客に客観的に伝わると思ったからです」

背景となった障害者を食い物にする犯罪

監督は、09年夏にプロデューサーの仕事を休み、2ヵ月ほど撮影に取り組んだ。長年の仕事仲間や同級生、かかわっていた「しんゆり映画祭」ボランティアなどの協力を得て、300万円の制作費で映画を完成させた。

「物語自体はもちろんフィクションです。でも、背景となる障害者を食い物にする犯罪は現実にある。彼らの『身元引受人』になり、手に入れた障害者手帳で金儲けをする人や、障害者専門の売春組織の存在などは実在します。そういった社会の事象を提示しつつ、個としての清剛らの生き方感じ方も描く。発達障害の兄は第三者からみると騙されていますが、自分を気にしてくれる人がいることで、彼はうれしさえ感じている。そういう、社会と個の両面からの視点があるのが、僕にとって大事でした」

物語が進むにつれ、兄弟の泥棒旅はしだいに悲惨となっていく。冬の町で凍え、ゴミ箱をあさるまでになる。しかし、それでも彼らは生きることをあきらめない。

「障害者に限らず健常者にとっても、今は生きていることがキツい時代。でも、そんな時、清剛を見ると、たくましく思える時があります。社会的には障害者といわれますが、本当の清剛はドラゴンボールとコーラが大好きで、好きなことに一直線。揺るぎない価値観の中で生きていて、そこにシンプルな力強さを見せつけられるんです」（山辺健史）

©2011 サンキューキネマ団

11月17日より、新宿K's cinema（モーニングショー）、川崎市アートセンターほかで公開中

©2011 サンキューキネマ団

2012.12.1